瀬戸内海国立公園・下津井と牛窓の風景準備

Preparation of Landscape in Shimotsui and Ushimado on the Nomination for National Park

小野 芳朗*
Yoshiro ONO

Abstract : In 1934, an area of Seto Inland Sea was nominated as National Park depended on the “discover” of the view from the top of the mountain, Mt. Washu in Shimotsui-cho by Dr. Tsuyoshi Tamura *et al.* However, the panoramic view from the top was prepared by Shimotsui-cho government and Shimotsui Train Co. Ltd. There is a leaflet on the view of the top of Mt. Washu published by the Shimotsui Train Co. Ltd. before the visit of Tamura. The view of the top can see around the whole area of Bisan Seto, islands and running ships. It was the discovered landscape by Dr. Tamura, but also prepared one by the local government and other stakeholders. Ushimado-cho government also prepared the landscape from the top of a hill, Kameyama that was developed as a view point. Dr. Tamura did not adopt the landscape and estimated not to be panoramic view. This paper discuss on the performance of the Committee of National Park represented by Dr. Tamura and the preparation by the local stakeholders.

Keywords: *National park of Seto Inland Sea, Shimotsui, Mt. Washu, Ushimado, Dr. Tsuyoshi Tamura*

キーワード: 瀬戸内海国立公園, 下津井, 鷺羽山, 牛窓, 田村剛

1. はじめに

瀬戸内海国立公園は昭和4、5年(1929, 30)の鷺羽山の「発見」によって確立したとされる。そこからの眺望である「多島海の発見」は、東京帝国大学教授・理学博士の脇水鐵五郎と内務省嘱託・林学博士の田村剛によるものであった。山上からの眺望景観という新しい視点がつくられ、それが瀬戸内海国立公園の核心となった説¹⁾は妥当なものと評価してよい。鷺羽山の「発見」をなした田村剛の論説には、大正10年(1921)時点では瀬戸内海を「海上公園」として、島々を船でめぐって「遊行」する公園とみていることから²⁾、その後の山上展望という鷺羽山の「発見」は画期的風景観の転換であったといえよう。当初、小豆島と屋島地域のみであったものは備讃瀬戸海域に拡大される。脇水はその著、『日本風景誌』³⁾の中で昭和4年(1929)に鷺羽山からの眺望を「発見」し、翌年田村も鷺羽山に登り、その絶景に国立公園の核心を得たとされる⁴⁾。瀬戸内海国立公園は、同様に王子ヶ岳、十禅寺山、御嶽山、高無坊、白石島、仙酔島の山上からの視点場が設定されて成立した。

従来の研究が、国立公園設置を内務省サイドより見て「新しい風景の発見」として捉えることは十分に根拠のあることではあるが、一方で指定された地元側の風景の準備はどのようなものであったろうか。本論文では国立公園を決めた脇水、田村の所属した国立公園委員会側の視線と、地元の県や町の視線の双方を検討する。脇水や田村によって「発見」された風景、山頂からの眺望「大観」は、地元で準備された風景であった。その眺望の国立公園指定の是非は田村の「大観」に沿って決められた。その事例を岡山県下津井、牛窓を対象に、その町の所蔵資料である「町会会議録」や「国立公園関係文書綴」に加え、「山陽新報」の記事をあわせながら実態を描いていく。

2. 下津井鷺羽山の発見と準備

西田正憲の指摘する昭和4年の脇水と翌5年の田村の鷺羽山の

「発見」は、彼ら調査団側としては事実であり実感であったといえる。昭和7年(1932)4月に国立公園候補地視察委員一行12名が鷺羽山を視察して、国立公園編入への道が確定するが、これは国府犀東や脇水、田村の「発見」があったからである。昭和4年(1929)に国府と脇水は鷺羽山に登った。西田論文には脇水の「発見」として「昭和四年の夏(中略)鷺羽山に登り、偶然にも同所が展望台として上掲の諸条件を具備する絶好の地点たるを発見し」とある¹⁾。また同論文における田村の「発見」は、その言質を『岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告』²⁾に拠っている。ここに田村の講演として「創立五十周年記念岡山県青年会」なる書に「鷺羽山に登った。そして私は意外な絶勝を発見して暫くはうつとりとして無言でいた」と劇的なその「発見」を引用している³⁾。

しかしながら原典を注意深く読むと以下のような記述がある。まず脇水の『日本風景誌』には、「昭和四年の夏、筆者が岡山懸下津井町の六口島の象岩を調査に行つた時、町長の案内にて町の東にある鷺羽山に登り、偶然にも」とある⁴⁾。また田村の言質を引用した前掲書の田村発言部分は「(前略)鷺羽山に登った、そして私は意外な絶勝を発見して」とある。この(前略)された部分には原典の『第廿七回会報 創立五十周年記念号 昭和五年十二月 岡山県青年会』に「此間久しぶり、香川県坂出町から小艇に乘せられて瀬戸内海を横断して下津井に上陸したが、こゝで保勝会の人々に迎へられて、やはり駕籠で鷺羽山に登った。そして私は意外な絶勝を発見して」⁵⁾とある。以上の事実は脇水や田村の「発見」の前提に、地元下津井の準備があり、また鷺羽山眺望は知られた存在であったことが示唆される。

その傍証として、ひとつには昭和2年(1927)指定の「新日本八景」中に百景のひとつとして下津井が選定されていること、その審査委員に国府、脇水、田村がいることがあげられる⁶⁾。また脇水の昭和4年の「発見」は、町長の案内とあるが同行の中に、下津井町役場の高本恭夫がいたことが知られている⁷⁾。高本は鷺

* 京都工芸繊維大学大学院建築造形学部門

図-1 『下津井鉄道名所図絵』掲載の鷺羽山眺望写真

羽山の考古学的調査を早くから実施していたとされ、前掲の『岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告』に「下津井鷺羽山」の原稿を書いた⁵⁾。そこには「内海風景として代表的景色を一時の下に大観しうる地点」と記され、その風景の特徴を山頂から白帆の浮かぶ青い海に東は小豆島、西は神島白石島あたりまでを一望にみわたせると表現している。この高本の存在が脇水を鷺羽山へ誘った。そして昭和5年11月19日に鷺羽山は国府、脇水が属する史蹟名勝天然記念物保存協会⁶⁾により名勝指定される。田村の「発見」は、この指定日のわずか8日前の11月11日である。田村の登頂がそれが初めてであり、その「発見」自体は事実であったとしても、新日本八景の選考委員として、また史蹟名勝天然記念物調査の情報を通して、鷺羽山眺望の情報は関係者で共有されたと考えられる。

またその眺望を準備した地元の存在が考えられる。この昭和5年の田村登頂時に案内した「保勝会の人々」の実名は明らかではないが、昭和7年(1932)4月17日の下津井訪問の国立公園候補地視察委員会(藤村義朗委員長)⁸⁾の下津井訪問を迎えたメンバーは、久郷梅松岡山県山林課長、内藤富五郎町助役、三宅義路下津井海岸保勝会幹部、篠原英太郎県知事属官などで、これに加えて下津井鉄道関係者が、秋山文治郎下津井鉄道専務、永山久吉県会議員(後に2代目社長)、吉福嘉一郎町会議員(下鉄の株主)が入っていた。ここに脇水や田村、その後の藤村委員会を誘導し、あるいは候補地を準備した stakeholders を推測することができる。それは岡山県、下津井町、下津井保勝会、そして下津井鉄道である。

下津井保勝会は、昭和3年(1928)に組織され、毎年下津井町から50円から500円の補助がなされていたが、昭和7年は5度にわたり合計1700円の補助がだされている⁹⁾。保勝会の会長は町会会議録(昭和7年4月25日)によると、町長が兼任することが決められている。つまり実質下津井町の直轄運営組織であった。昭和7年10月8日に12箇所の国立公園正式候補地の中に選定されると、保勝会は11月6日には祝賀会を挙げている。この報道が山陽新報によってなされ、「天下無敵を誇る大展望台、鷺羽山」の見出しで「この天然の玉峰を世に出すべく必死の運動をつづけ、中にも保勝会の幹部は自費を投じて涙ぐましいまでに東奔西走した¹⁰⁾」とあり、保勝会の目的とした鷺羽山の風景価値が「大展望台」「天然の玉峰」であり、そこからの「大観」を目指したことが窺える。

また、鷺羽山視察に出迎えた岡山県の官吏久郷梅松は東京帝大林学実科卒業で、やはり東京帝大林学卒の田村の先輩であった。大正10年(1921)に田村が岡山後楽園を名勝指定の為に岡山を訪れた際、西外園の設計を県が委託した。その時、植木調達を担当したのが山林課長の久郷であった。そして大正15年(1926)7月1日後楽園の管轄が県内務部地方課から山林課へ移行した際に、職掌として後楽園事務所長を兼任している。昭和9年(1934)室戸台風の復旧工事設計を田村に委託したのも当時まで事務所長を務めた久郷と考えられるなど、後楽園を通して久郷と田村は関係が深かった。久郷はさらに岡山県国立公園協会常務理事を兼ね、その設置事務の中心にいた。田村の鷺羽山への直接の誘導に久郷が関与したという確証は得られていないが、このよ

うな人物が、県国立公園協会常務理事として情報提供源のポジションにいたことは事実である。地元の「大観」の準備の上にこうした人脈が働いたと推測できる。

さらに鷺羽山眺望の開発とそこへの誘導は下津井鉄道の役割が大きかった。下津井保勝会の会長を昭和9年より務める下津井町長永山久平の一族、永山久吉は下津井鉄道の2代目社長となる。下津井鉄道は、明治44年(1911)軽便鉄道として回船業者や肥料問屋の出資によるもので、下津井-丸亀間の四国連絡航路の維持の為に、内陸都市への交通手段として建設された¹¹⁾。その下鉄は昭和の初期、恐慌による不況のため経営不振に陥っていた。永山の回想録に田村が文を寄せ、「下鉄がただ一般乗客と荷物の輸送だけでは経営がうまくないので、この天下の絶景鷺羽山という、眠れる観光資源の活用を思いつかれ、それにより会社が立ち直った」といっている¹²⁾。その回想録には永山が昭和6年(1931)に鷺羽山の眺望を利用して乗客を誘致することを思い至ったという¹³⁾。しかし既にその眺望は下津井鉄道自身が「開発」していた。昭和3年に発行された『下津井鉄道名所図絵』には、「鷺羽山の大見晴し」として四国側より下津井から鷺羽山、唐琴、渋川の海岸までを描いた鳥瞰図が存在する¹⁴⁾。またその裏面には鷺羽山山頂より見渡した備讃瀬戸中の島々のパノラマ景の写真が掲載されている(図-1)。すでに鷺羽山絶景は昭和3年時点には地元で知られ、鉄道会社による「開発」により宣伝もなされていたことがわかる。このパノラマ景の写真の構図は、高本恭夫による昭和7年の『岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告』中の掲載写真とアングルがほとんど同じである(光陰は異なるので別写真)。こうした鷺羽山山頂のパノラマ景観は、早くから下津井には「開発」されていた視点場であったと推定できる。

以上のように下津井鷺羽山の脇水、田村による「大観」の「発見」が国立公園指定の核心となることは事実ではあるが、そこに至るまでは「大観」の準備が地元、下津井保勝会(すなわち下津井町)と下津井鉄道によってなされ、その準備の上に新日本八景指定での同僚委員からの情報、あるいは岡山県官吏との関係などが絡んで、昭和5年の「発見」に繋がったとみることができる。

3. 牛窓亀山公園の準備と視察

牛窓も瀬戸内海国立公園に昭和9年当初より指定されるが、その指定をめぐっては下津井のように眺望景観、「大観」を準備したつもりであったが、それは田村の考える「大観」には適わなかったようだ。

『牛窓町史』¹⁵⁾には、昭和8年(1933)4月11日と5月22日の山陽新報を引用し、「運動の如何によっては、従来とり残されてゐた牛窓附近の景勝地も、内海国立公園の圏内に入れられることは想像に難しくなく」あるいは「牛窓・笠岡の明朗な景観は、他との振合を考慮されて今回は内海公園区域内に包含されぬことになっている模様である」とあり、鷺羽山等展望地以外の笠岡諸島と牛窓は昭和8年時点でも区域内に入っていなかった可能性が高かったとしている。

国立公園指定へ向けての推進の母体となったのは、牛窓商工会と牛窓保勝会である。牛窓商工会は明治41年(1908)1月10日に設立、第1期役員には理事長に石井卯次郎、理事に高祖吉三郎

以下7名の名がみえる¹⁶⁾。それによると、「明治の初年頃迄瀬戸内海に於て屈指の商業地として雄飛せし牛窓港も山陽鉄道の敷設等の影響を蒙り、年々衰頹の一路を辿り日露戦後の経済界大反動に遭遇して疲弊一層甚だしきを加へたり」とあり、町勢挽回を期しての結成であった。牛窓保勝会は名所旧蹟の保存につとめ、昭和2年(1927)には明治20年開設の海水浴場の経営を始める。

海水浴場東端の丘の上にある亀山公園は牛窓における展望地として整備された。早くも大正10年(1921)、新聞では「奇松の点々とした様な内海を隔て、讃岐の連峰が屏風を立てたやうに南を囲んで、東に播磨灘を望み、行き復る真帆片帆漁船が浪に揺られてゐる様」¹⁷⁾と記している。田村はこの時点で牛窓を景勝地とは認識している¹⁸⁾が、眺望景観があると知っていたのかは明らかでない。少なくとも牛窓の眺望に関する記述はない。

年代不詳ながら戦前の亀山公園の設計図面が牛窓町資料中に残されている¹⁹⁾。公園は八幡神社(牛窓神社)に至る参道中途に作られた。そして牛窓商工会は、会長に高祖鶴雄(代表的な地主一族、造り酒屋)を迎える¹⁶⁾。高祖鶴雄は商工会会長として国立公園誘致に尽力したのち、のちに町長に転出する。

昭和7年4月の候補地視察委員会は牛窓を訪れていない。その編入要請を牛窓商工会が運動した形跡がみられる²⁰⁾。昭和8年(1933)4月、瀬戸内海国立公園の区域決定調査に田村剛一行の訪問が報道される4月11日の記事²¹⁾によると牛窓は調査区域に入っていた。4月13日の役員会において区域内編入を期すべく、「国立公園委員」を県当局に派し、一行の調査プランを作ったとある。その概要は「眺望の好き亀山公園、西寺、吉田山等に案内して波に煙る阿讃の諸島の絶景」とあり、展望の視点と多島海をアピールする田村好みの風景が用意されていた。山陽新報の記事には、5月2日に岡山駅に到着した田村に、牛窓町長、笠岡等関係町村長が、名所案内、景勝写真等を差出し視察日程に繰入れるよう猛攻撃をなした、とある²²⁾。

そして田村一行は小豆島から牛窓に到着する。この「田村一行」の瀬戸内海区域決定(追加)調査は、昭和8年4月16日から5月31日にかけて行われるのであるが、田村とその随行が全員一緒に動いていたのではない。その詳細「予定」が牛窓町資料に残されている²³⁾。先発隊の内務省加藤技手、黒田技手、戸坂技手が屋島、庵治、五剣山、小豆島、豊島、直島をまわる。田村が屋島で合流し、鳴門海峡、小豆島の後、牛窓にはいる予定であった。その後、一行は宇野から備讃諸島、塩飽諸島、笠岡諸島に至り、倉橋島から広島に上陸する予定であった。田村の上陸ののち、加藤、黒田、戸坂の3名は再び調査に戻る。この昭和8年の田村の調査は、すでに「発見」した展望地の調査ではなく、どの区域を編入するかという田村の意思決定のために実施されたと考えられる。

実際には5月2日に岡山駅に到着した田村は、阿波鳴門、高松、小豆島を経て、牛窓には5月6日に入った。牛窓の調査はこれ一回きりであった。昭和8年5月6日午後3時田村一行は小豆島を出港し²⁴⁾、牛窓湾に浮かぶ前島、鼠島、青島、黄島を視察、6時に牛窓港に上陸し、照月旅館(当主:菊田加代)に入った。照月旅館においては6日夜9時からの座談会がもたれた。牛窓側から津島警察署長、小橋廣衛町長、川崎小学校長、高祖鶴雄商工会会長(観光常設委員→公園設置委員)、森照二商工会評議員(公園設置委員→土木常設委員)以下、町会議員、商工会役員23名が集った。これに岡山県の次田守岡山県山林課技手(岡山県国立公園協会技手、のちに県史跡名勝天然記念物調査会囑託)と藤田保健課長が加わっていた。高祖や森のように商工会役員でありながら町の常設委員を兼ねる者もあり、牛窓町が官民一体となって誘致していた陣容がうかがえる。田村は牛窓については「牛窓が釣の名所と云ふ事は聞いたが、それらの事も公園の利用方法の内に

入れる必要のある事だらう」と言い、眺望地については発言していない²⁵⁾。明るる7日、問題の亀山公園に登り、その後黒島、中小島、端小島を見てのち、児島郡小串港へ向かった。

ところがその後の田村の発言は牛窓に肯定的ではない。調査を終え、5月16日午後5時19分広島より岡山駅に降りた田村への記者団の質問で、「岡山県下では王子ヶ嶽、白石島あたりは見逃すことが出来ぬ」と語る。いずれも「大観」を有する眺望地の認識であった。しかし牛窓については、「大體において区域は内定してゐるところ以上に新たに擴げることは仲々困難である。岡山県下では牛窓、宇野、王子ヶ嶽などを新たに視察したがその結果についての意見は遺憾ながら申上げる訳にはいかない²⁶⁾」とある。つまり今回の調査は「内定」している区域の確認に加え、新しい箇所がないかを調べたもので、よほどでないと思われ難いというものであった。またおそらく5月17日昼間におこなわれたであろう(16日は午後七時半より岡山一中同窓会、17日午後5時25分発岡山駅から帰京)、岡山八番町の田村の自邸における記者座談会で、記者に「牛窓の亀山八幡から指呼の間に点綴する前島鼠島黄島黒島などの美景は？」と問われ、対して田村は「却々捨て難いものがある……(新聞の記載のママ)」と言葉を濁している²⁷⁾。この2度の記者取材と田村の牛窓編入への消極姿勢が前述した5月22日報道の「今回は内海公園区域に包含されぬことになってゐる模様」につながったとみてよい。牛窓の亀山公園の眺望に対する言及は皆無であった。

これに対して牛窓町は県と協力して巻き返しにでる。それは眺望景観に頼ることをやめ、島嶼部の指定に照準を合わせたものであった。県技手次田より5月29日牛窓町長小橋宛に「先般田村博士御来県ヲ機トシ県會議事堂ニ於テ国立公園施設ニ付打合有之候件ニ関シ関係町村ノ御希望事項ヲ取纏メ本県へ具申致度候」²⁸⁾とある。これに対応して小橋町長が内務大臣山本達雄宛「国立公園区域認定請願書」をまとめたのが6月10日である。その請願書には「田村博士ノ御踏査ヲ経タル處有之町民挙ツテ其ノ編入ヲ熱望シ之ガ為メニハ相当ノ犠牲ヲ払フヲ敢テ辞セザル決心ニ有之候。是非共区域中ニ御決定被下度別紙町会決議書並ニ調査書類相添此段請願候也」²⁸⁾とある。その町会決議書とは、「国立公園区域認定ニ関シ必要ノ場合ハ黒島其他ノ島嶼ニ散財セル私有地ヲ買取シテ町有トナシ将来其筋ノ施設経営ニ対シ異議無キモノトス」²⁸⁾とある。添付の調査書には景勝地や交通・人口・施設の有無など牛窓の詳細な現勢とともに、町の予算決算ならびに前島など島嶼部における土地台帳の写しが添付されている。その地主の筆頭は高祖徳三郎である。

こうした挽回への牛窓町と岡山県の運動は、結果的に功を奏した。昭和8年11月10日の内務省国立公園委員会に向けて、岡山県が「新たに編入かたを申請した邑久郡牛窓および児島郡山田村地内出鼻の牛島は何れも編入予定区域に追加提案されることになった」²⁹⁾とある。

結局、国立公園には牛窓の島嶼部が編入される。11月30日の国立公園委員会では田村はこう語る³⁰⁾。「此ニ牛窓町附近ノ島嶼ガアリマス此辺一体ハ除外サレテ居リマシテ(今回編入されたので:筆者注)海面ハ相当広クナリマシタ」「牛窓附近デハ前島、黄島、黒島、青島ト言フヤウナ此辺一帯ノ島嶼ハ、当初ノ区域ヲ拡張致シマシタ結果当然新ニ区域ニ編入セラレマシタ」。そして昭和9年、国立公園設置のための調査団が来る。2月22日、加藤技手と囑託稲垣龍一が牛窓町に入り、23日前島、24日豊島、25日黄島、鼠島に「杭打ち」を行った³¹⁾、³²⁾。

亀山公園は区域に入らなかった。牛窓が当初区域から漏れたのは、牛窓町が準備した亀山公園八幡社が、内定している鷺羽山や白石島のような展望地に比べて、視点場の高さが低いことや視界が開けるという点においては劣るという田村の国立公園風景観で

ある「大観」に欠けていたのではないだろうか。

4. おわりに

本論では、下津井鷺羽山と牛窓亀山公園を瀬戸内海国立公園への編入過程を比較した。以下本論で明らかになった点をあげる。まず下津井である。

- 1) 下津井鷺羽山の情報は昭和2年指定の新日本八景で百景に指定されることから、選考委員の国府犀東種徳、脇水鐵五郎、田村剛に入っていたと考えられる。
- 2) 昭和4年に国府と脇水を鷺羽山の山頂に誘導したのは下津井町役場で『岡山県史蹟名勝天然記念物調査会報告』に「下津井鷺羽山」を「大観」と著した高本恭夫であった。
- 3) 国府と脇水は史蹟名勝天然記念物保存協会のメンバーであり、鷺羽山は昭和5年11月19日に名勝指定される。
- 4) 田村は同年同月11日に下津井保勝会の人々に迎えられて輿に乗せられて鷺羽山に登頂する。
- 5) 下津井保勝会会長は町長が兼任し、町費で運営する実質下津井町の組織である。
- 6) 昭和7年藤村義朗委員会を迎えたメンバーから、その準備には下津井町以外に岡山県と下津井鉄道が関与していた。
- 7) 岡山県官吏は久郷梅松山林課長で岡山県国立公園協会常務理事を兼ねた設置事務の中心人物である。また田村と東大の同門、岡山後樂園を通しての知己であった。
- 8) 下津井鉄道永山久吉社長は町長永山久平の一族（続柄は不明）である。昭和3年に鷺羽山からの眺望写真を掲載したパンフレットを作り、昭和6年に観光客誘致を発想する。

これに比して牛窓の同時期の動向である。

- 1) 亀山公園は大正10年には眺望地として整備されていたが、同年の田村の記事には牛窓は景勝地としてのみ記され、眺望についての言及はない。
- 2) 牛窓商工会、牛窓保勝会が国立公園設置への運動を本格的に始めるのは昭和8年田村訪問時と考えられる。
- 3) 昭和8年5月6、7日の田村の牛窓訪問時に眺望景観として亀山公園を準備した。
- 4) 田村は登頂するがその眺望に言及せず、牛窓の指定にも消極的であった。
- 5) 牛窓町は岡山県とはかり、照準を島嶼部に変更し、その編入が認められた。

以上の事実から、鷺羽山眺望の情報は関係者に共有され、下津井町ではその眺望が準備され、昭和4年から5年にかけての「発見」はこの上に成立したとみてよい。その地元関係者は町、下津井鉄道、そして岡山県官吏である。実際に地元では海水浴場や宿泊施設の準備も行われるが、国立公園指定の核心は鷺羽山の「大観」への誘導であった。これに比して牛窓は眺望地亀山公園を準備はしていた。しかし田村の来訪した昭和8年時点で、既に田村の視線は鷺羽山の経験による「大観」が国立公園の視点場にふさわしいとみなされ、亀山公園の高さの眺望は適わず候補地指定そのものから脱落しかける。

以上、西田¹⁾や堀³³⁾が指摘しているように、瀬戸内海国立公園指定は「大観」の存在が国立公園としての資格と考えていたのではない、という推論を本論では強化した。指定の核心とされる田村剛の「大観」は下津井町では準備され、そして「発見」され、候補地選定の基準となった。その視点場を準備できる可否かで指定の明暗が分かれたとみることができよう。

謝辞：本論の資料収集には岡山県立記録資料館、岡山地方史研究会金谷芳寛氏、下津井鉄道株式会社、倉敷市議会事務局、倉敷市歴史資料整備室のご協力を得た。また岡山大学学生森大輔、内田英子、伊藤乃理子の諸氏の協力もおおいだ。深甚の謝意を表します。

引用文献

- 1) 西田正憲（1997）：瀬戸内海における多島海景の変遷と脇水鐵五郎・田村剛の視覚：ランドスケープ研究 60(5), 425-430
- 2) 山陽新報（1921）：9月25日
- 3) 脇水鐵五郎（1939）：日本風景誌：河出書房
- 4) 田村剛（1930）：「鷺羽山」：第廿七回会報 創立五十周年記念号、岡山県青年会
- 5) 岡山県史蹟名勝天然記念物調査会編（1974）：岡山県史蹟名勝天然記念物調査会報告第九冊（復刻版）：名著出版、18-19
- 6) 高木博志（2008）：『史蹟名勝天然記念物』昭和編・解題：不二出版
- 7) 山本慶一（1972）：鷺羽山開発史：倉敷春秋、第4号
- 8) 山陽新報（1932）：4月19日
- 9) 下津井町役場（1929-1935）：町会会議録、昭和4、5、6、7、9、10年の各年度簿冊
- 10) 山陽新報（1932）：10月23日
- 11) 青木栄一（1969）：下津井鉄道の成立とその性格：地方史研究 19巻97号、45-60
- 12) 田村剛「序して」（1958）：下記『下電と私』中にあり
- 13) 永山久吉（1958）：下電と私：下津井電鉄株式会社
- 14) 下津井鉄道株式会社（1928）：下津井鉄道名所図絵
- 15) 牛窓町（2001）：牛窓町史通史編、1087-1088
- 16) 牛窓商工会役員名簿（1934）：備前牛窓：牛窓商工会
- 17) 山陽新報（1921）：8月17日
- 18) 同（1921）：9月25日
- 19) 邑久郡牛窓町役場（年代不詳）：亀山公園計画図面
- 20) 山陽新報（1933）：4月16日
- 21) 同（1933）：4月11日
- 22) 同（1933）：5月3日
- 23) 邑久郡牛窓町役場（1936）：国立公園関係書綴
- 24) 山陽新報（1933）：5月7日
- 25) 同（1933）：5月8日
- 26) 同（1933）：5月17日
- 27) 同（1933）：5月19日
- 28) 邑久郡牛窓町役場（1936）：国立公園関係書綴
- 29) 山陽新報（1933）：11月1日
- 30) 国立公園委員会（1933）：昭和8年11月30日議事録 瀬戸内海国立公園の誕生：環境庁 所収
- 31) 山陽新報（1934）：2月25日
- 32) 邑久郡牛窓町役場（1934）：国立公園二関スル書類
- 33) 堀繁（1994）：瀬戸内海国立公園の区域の取り方とその特徴 瀬戸内海国立公園の誕生：環境庁 「田村博士の国立公園風景観はパノラミックで雄大な「大観」にある。公園全体が見渡せるような雄大な風景、つまり「大観」の存在が国立公園の資格と考えていたのではないか。」